

京都精華大学構内窯跡
発掘調査現地説明会資料

1987年5月10日(日)

(財)京都市埋蔵文化財研究所

1 はじめに

岩倉の地は京都盆地の東北部にあり、南方を松ヶ崎丘陵によって画され、残る三方も北山や比叡山等に囲まれた小盆地である。調査地は、岩倉の盆地の西北方にある木野の小谷沿いの山腹に位置している。現在は、この小谷と周辺山腹が京都精華大学の敷地となっている。岩倉及びその周辺地域は古墳時代末期には須恵器の生産が開始されており、以降飛鳥時代から奈良時代、平安時代にかけては、須恵器と瓦の生産地帯として早くから知られていた。平安時代初期の官窯として著名な栗栖野瓦窯や小野瓦窯は、それぞれ岩倉盆地内に位置している。この地での瓦の生産は平安時代末期まで続く。また、平安時代には緑釉陶器や土師器の生産もこの地でおこなわれていた。中世以降にも、幡枝や木野で土師器生産が知られている。木野では、近年まで土師器皿（かわらけ）の生産は続いていた。このように、岩倉の地は、京都のなかにも窯業生産の古い歴史と伝統を持つ土地柄であった。

2 発掘の経緯

調査は、昨年12月に現キャンパス周辺の拡張地域を対象とした遺跡の分布調査から開始した。その結果、中の谷1号窯とされる既発見の窯跡に加えて新たな窯跡が存在している確証が得られた。その後今年1月には窯体数と位置の確認を目的として3ヶ所の探査対象地を設定し、磁気探査を実施した。本発掘調査は、これらの予備調査の成果をふまえて確定した1区から3区の調査区を対象として、今年3月2日から調査を開始し、現在に至っている。

当初の調査計画では、1区においては、想定された2基の窯跡を対象とした全面調査、2、3区では、遺跡の存在の有無及び拡がりを確認するためのトレンチ調査を中心に実施する予定であった。先行して開始した2、3区の特レンチ調査のうち、3区においては遺物の出土はみたが明確な遺構は検出は出来ずに調査を終了した。しかし、²3区においては、トレンチ調査区において多数の遺物が出土する流土で埋没した谷筋を検出した。また、調査区内に新たに設定した数ヶ所のテストピットでは、窯体、灰層を検出することができた。2区の出土遺物内には、平安時代の灰釉陶器と判定出来る陶片やその生産に使用された独特の焼台が含まれており、きわめて注目される結果となった。確実な灰釉陶器窯跡の発見は近畿地方以西では初めての例であり、その学術的価値は極めて高いといえる。このため大学当局と緊急に協議を行い、2区においても窯体調査を含む本調査を実施することになった。このような経過を経て現在1区、2区の調査区において発掘調査を進めている。

なお、京都精華大学の大学本部及び各調査区は左京区岩倉木野町である。

3 調査成果

1区 調査区は大学キャンパスの再奥部山裾の西向き傾斜地に位置している。1区1号窯（中の谷1号窯）同2号窯の2基の須恵器窯跡、1号窯の灰原、方形の焼土堀1基を検出した。

1号窯は、半地下式の窖窯である。天井部は崩落していたが、その他の部分については残存状況は良好である。窯体は焚口から煙道部までほぼ完存しており、50cm以上の深さで側壁が残存しているところが殆どである。全長は、水平距離で9.5m、最大幅1.8m、焼成室の床面傾斜度は20度から27度である。窯体の構造及び規模は奈良時代の須恵器窯では平均的なものである。床面や側壁部には、修復部や塗り重ねが確認できる。幾度かの使用と修復が繰り返されたことは明瞭である。窯体内及び床面上からの出土遺物はごく少なかった。

1号窯の灰原は、焚口きわの狭い前庭部から下部の斜面にそい南西側に広く堆積しており、厚い部分は50cmを超える。灰、炭、焼土、窯壁片などが混在した状態で堆積しており、そこからは、生焼けや融着したり、焼け歪んだりした須恵器片が多量に出土している。

須恵器には杯、皿、蓋、鉢、壺、甕、他の各器種があり、型式的には奈良時代前半代に比定出来るものである。

2号窯は、岩盤をくりぬいて構築された地下式の窖窯である。天井部も一部残存しており、全体としては焚口から煙道部までは完存していた。加えて床面には破損しているとはいえ焼成途中の遺物も残っており残存状況は非常に良好である。焼成室の床面の傾斜角度は20数度から煙道部に向けて徐々に急傾斜となる。側壁や天井部では岩盤が直に焼けている部分と修復して貼り付けた壁土が焼結した部分がある。修復して何回も使用したものと見られる。

飛鳥時代から奈良時代の京都近郊の瓦陶兼業窯には、この地下式の窖窯と類似した構造と規模を有する例が多い。

この窯跡は、その検出状況から判断して、製品の焼成作業を行っていた途中に天井部の大半が崩落して放棄されたものであろう。そのため窯詰めしていた製品は床面上で割れて散乱し、焚き口方向へ流れだし、燃焼室では炭化した燃料の上に陶片が堆積している。このような検出状況は、他に例の少ない非常に貴重な資料である。床面から出土する遺物をすべて整理すれば、当時の窯詰め状態や焼成時の器種構成等を明らかに出来るであろうし、また燃焼室の炭化材は、燃料の種類を教えてくれるであろう。

須恵器には、杯、蓋、鉢、壺、甕、他の機種があり、型式的には1号窯の

ものと同様に奈良時代前半代に比定できる。

2区 大学本館の裏山裾部の南向き斜面に位置している。灰釉陶器窯である2区1号窯、同窯灰原、焼土拡1基を検出した。

1号窯は、半地下式の窖窯である。窯体下半部は焚口から煙道部まではほぼ完存しているが天井部は総て崩落していた。全長は最終段階の焚口から煙道部まで水平距離にして6.0m、最大幅は1.1m、焼成室の床面傾斜角度は30度から33度である。全長に比べて床面が狭く、非常に細長い特徴的なプラン形を呈しており、灰釉陶器焼成のための改良と見られる。窯体と床面からの出土遺物のごく少ない。

灰原は、南へ下がる小谷筋に沿ってひろがっている。灰層は厚い部分で30cm弱の堆積層である。灰原からは、灰、炭、窯壁片などとともに多量の焼き台と灰釉陶器の破片が出土している。他に少量の緑釉陶器とその焼き台に使用された陶片が出土した。

灰釉陶器には、椀、鉢、壺などがあり、他に無釉の同種の陶片も出土している。緑釉陶器は、椀を確認したにとどまる。これらの出土遺物は、形式的には平安時代前半代の時期幅におさまるものと判断している。

焼土拡は、1区でも検出している。両者とも方形の堀込みで側壁部が灰色から赤色に焼変しているが、底部は焼けていないなど共通した特徴を持つ遺構である。炭窯とする意見もあるが、構造、焼け具合など不明確な点も多い。

あとがき

灰釉陶器は、奈良時代末期に須恵器から発展して形成された高火度釉を施した日本で最初の陶器であり、生産の本格化は平安時代に入ってからである。低火度釉の緑釉陶器とともに古代後半を代表する日本製の陶器とされる。灰釉陶器は、愛知県の猿投窯（現在の瀬戸市にある）を中心として岐阜県、静岡県、三重県の一部など東海地方において発展し、同圏においてだけ生産され、平安京を初めとする他地域に供給されていたという認識が殆ど定説であった。しかし、最近になって、東では福島県の会津若松において灰釉陶器窯跡が発見されたと報ぜられている。今回の発掘調査の大きな成果の一つは、京都において灰釉陶器窯跡を発見し、その窯跡の発掘調査が実施出来た事である。この発見は、今日までの窯業史の通説的理解の変更をせまるものである。この成果は、大学当局をはじめとする関係各位の努力と理解に負う所が大きい。ここに記して感謝の意を表するものである。

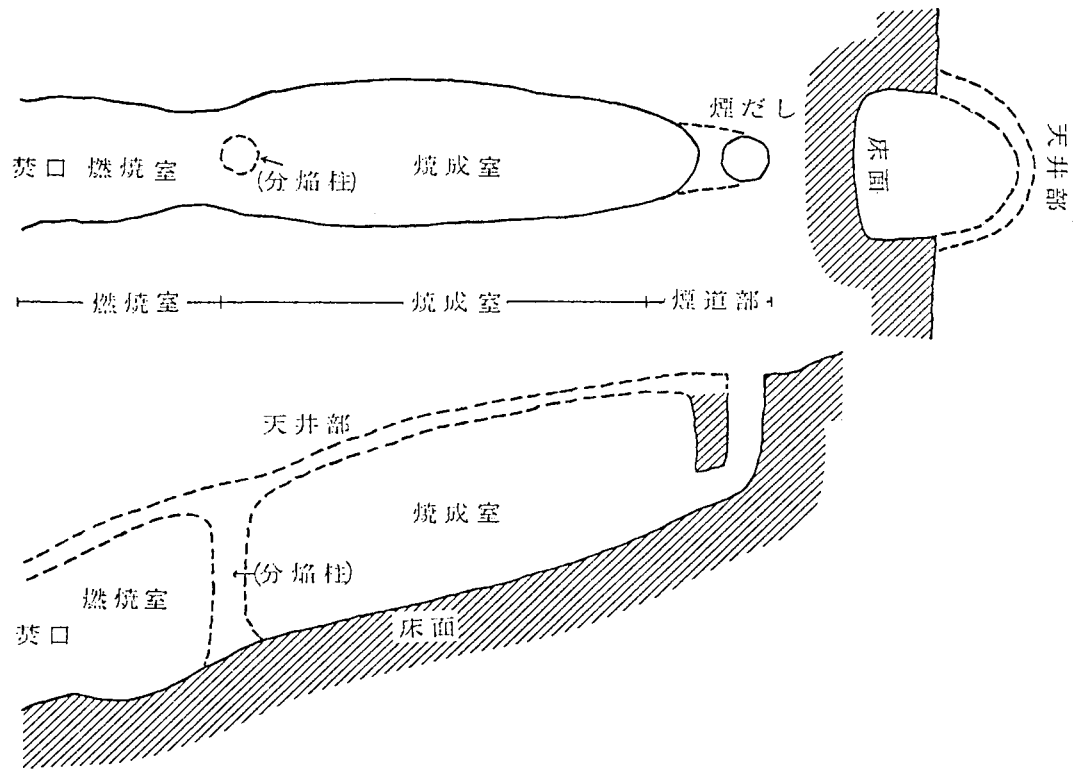
調査要項

遺跡名 京都精華大学構内窯跡（仮称）

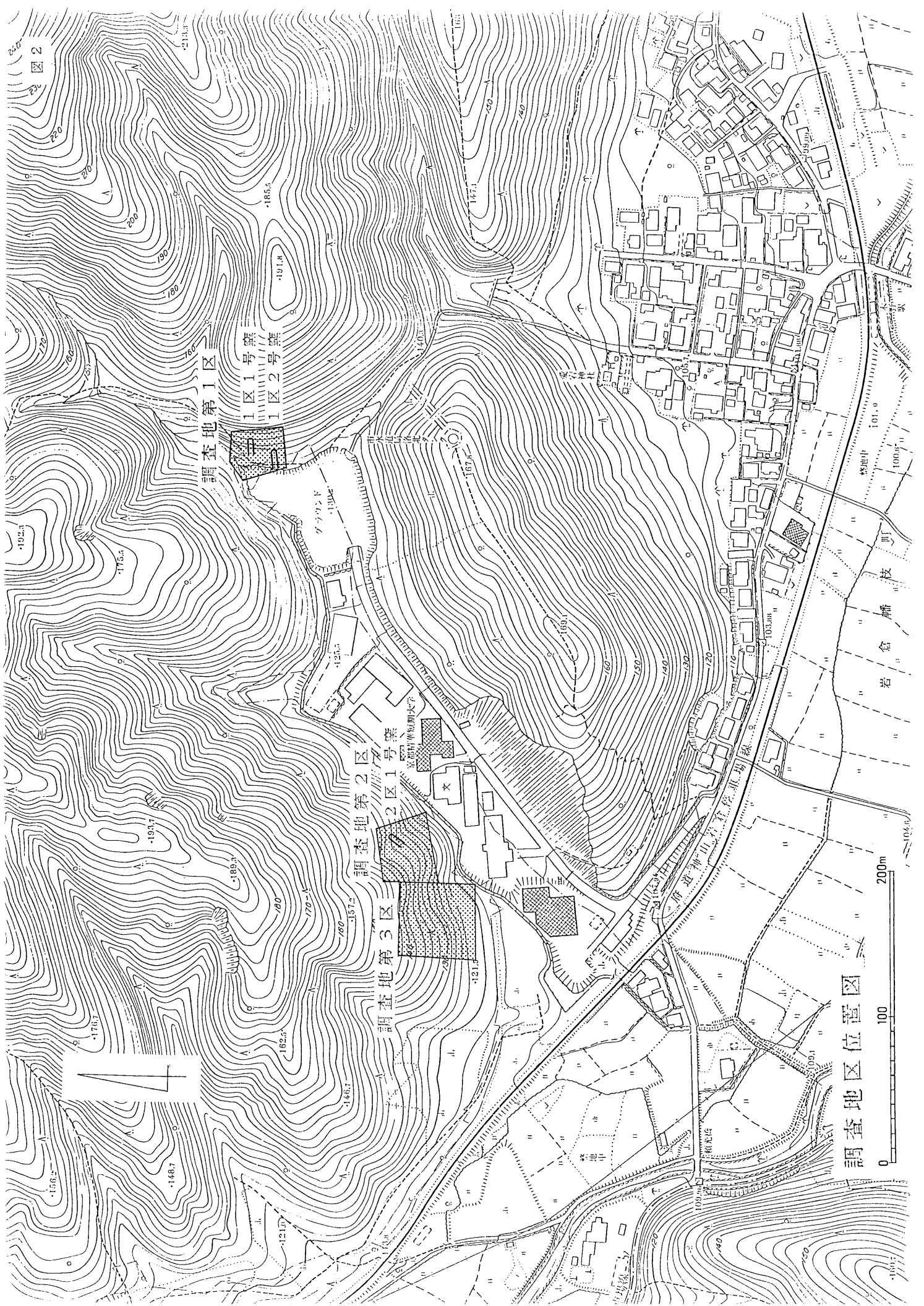
所在地 京都市左京区岩倉木野町

調査期間 昭和62年3月2日～5月30日

調査主体 （財）京都市埋蔵文化財研究所



窯の各部名称

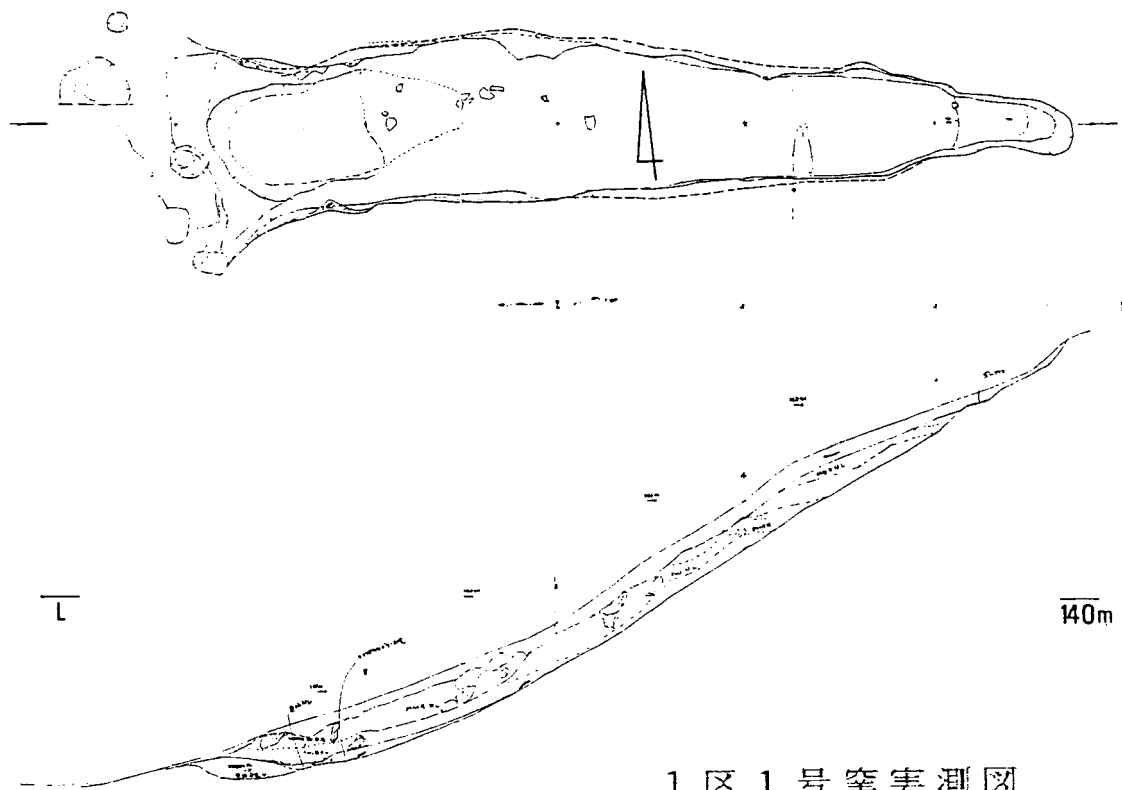


調査地区位置図

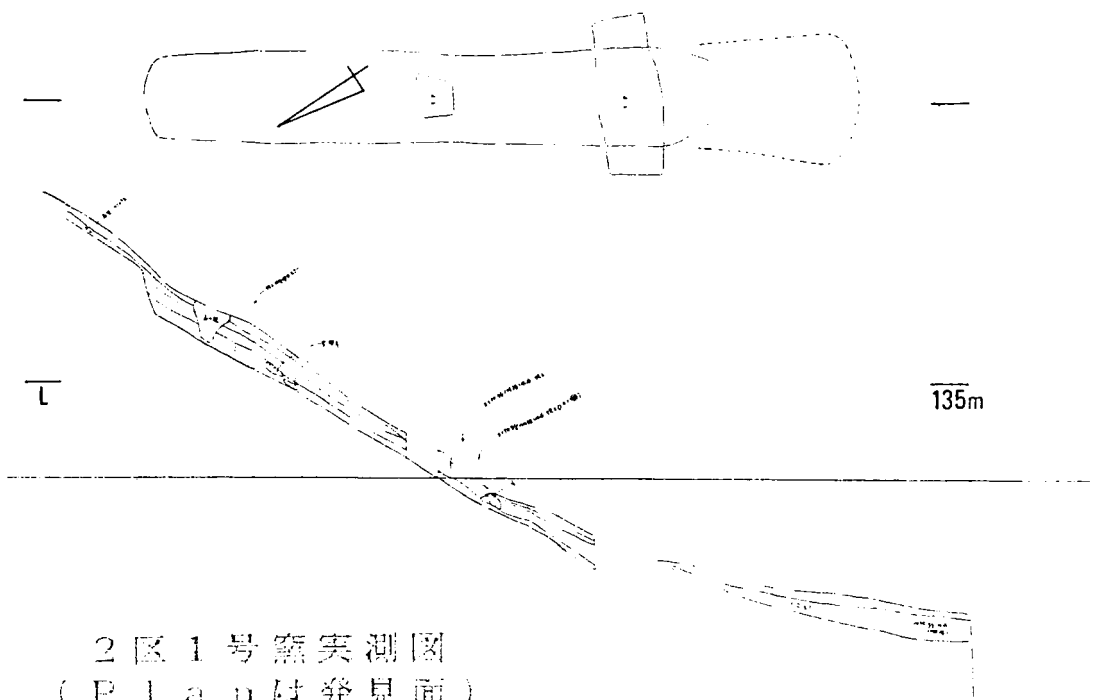
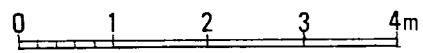




調査地点位置図

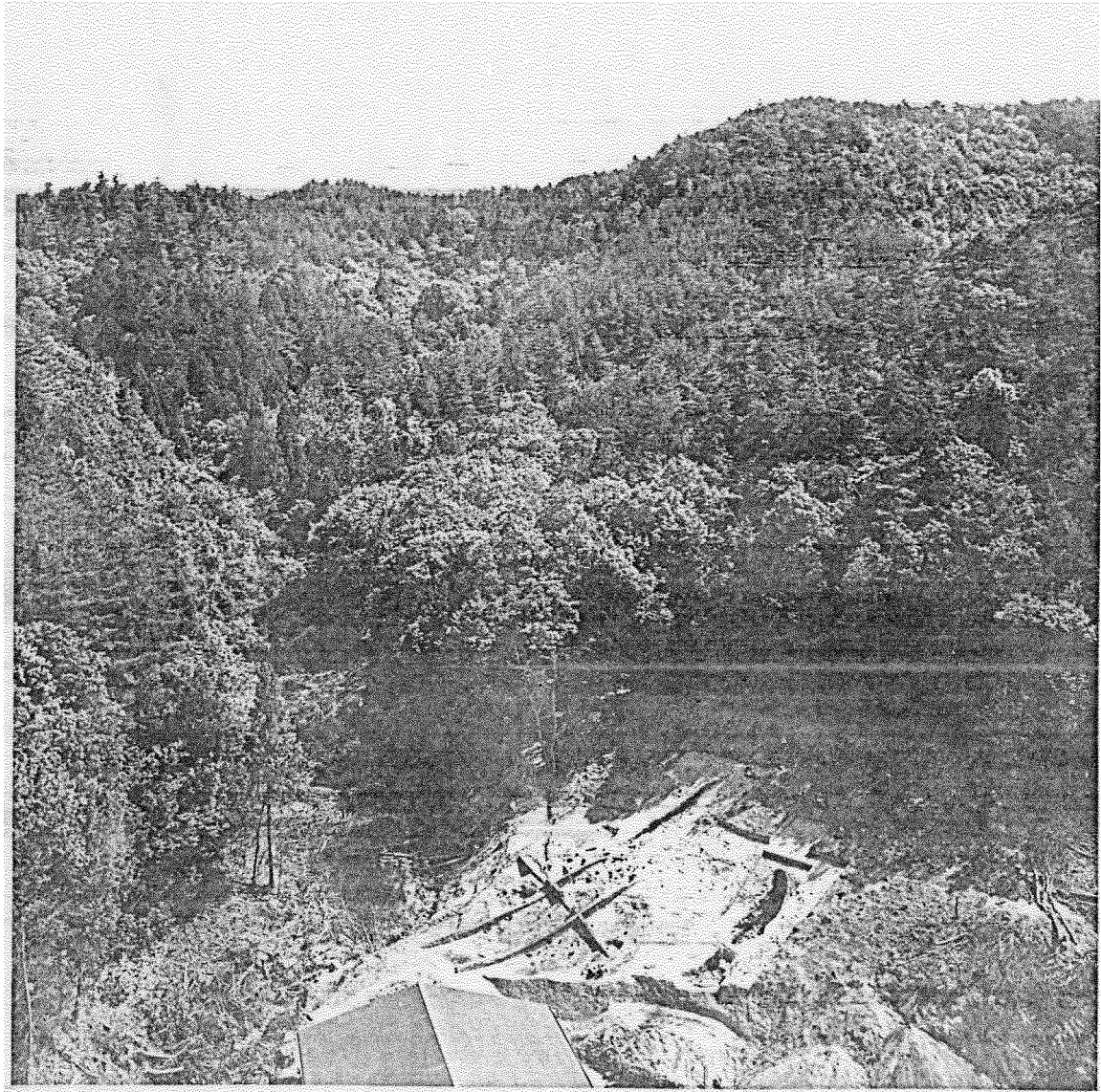


1区1号窯実測図



2区1号窯実測図
(Planは発見面)

1区1号窯・2区1号窯実測図



1 区 透景



1 区 全景